第13回「心と命のフォーラム」

「年齢は捨てなさい」

総本山善通寺

一、精神革命の旗手
一、宗教連合の具現
一、地上天国の建設

「生きる作法・死ぬ作法」と題し毎秋、香川県善通寺市の総本山善通寺（菅智潤管長、法主）で開催している「心と命のフォーラム」の第13回が10月11日、菅智潤管長、解剖学者の養老孟司氏、作家の下重暁子氏、浄土真宗本願寺派称讃寺住職の瑞田（たまだ）信弘師のメンバーで開催された。今回のテーマは、下重氏の著書の題でもある「年齢は捨てなさい」。約500人の聴衆がそれぞれの発言に耳を傾けながら、自分の生き方について思いをめぐらせていた。

善通寺でのフォーラムの様子＝10月11日、香川県善通寺市

最初は登壇者が自己紹介を交え発言。菅管長は「四国遍路が10年前より4割減少している。外国人の参拝者は増えており、弘法大師生誕1250年の令和5年を目標に、回復させたい」と、下重氏は「昔から話は嫌いで、書くことが大好きだった。80近くになってベストセラーを出し、やっと物書きとして認められたので、これからが私の人生だと思っている」と、7月に高松市塩江の大滝山で親子虫取り大会を催した養老氏は「四国は面白いところなのにあまり知られていない。もっと多くの人に来てほしい」と、瑞田師は「2500年前、インドに生まれた釈迦は、生老病死を人類共通の苦とし、それを克服するために仏教を興した。今日のテーマはその一つの老で、どうすれば捨てられるのか興味がある」と述べた。

次いで下重氏が近著の『年齢は捨てなさい』（幻冬舎新書）について解説。「実年齢が83歳なのは仕方ないが、自分の感覚では60前後、いや少女の頃と同じだと思っていて、それが誇りでもある。年齢は自分で決めればよく、人に決められるのは不愉快だ。保険証をなくしたので区役所に電話すると年齢を聞かれ、来なくても再発行の書類を郵送すると言われた。後期高齢者も嫌な言葉で、お上のやり方にただ従うような生き方はしたくない」と語った。

養老氏は「よたよたすると年を感じるが、それ以外の時は年を忘れている。高齢になると少し先には死ぬということだが、私は死ぬないと思っている。自分で自分の死を体験することはできないからで、何かを体験するとそれは次の世界に行っていることになる。大変なのは身近な人の死で、過度に落ち込まないようにしたい」と述べた。

菅管長は「僧は60になって一人前で、各宗派や大寺院のトップは80以上の高齢の人が多い。私は69歳だが、42歳で再婚し、一男三女をもうけた。善通寺は高松市内で三つの老人施設を経営しているが、平均年齢は男性が84歳、女性が89歳。今、介護士不足が深刻で、これからは多くの人が在宅になるだろう」と語った。

瑞田師は「養老先生と一緒に大滝山で虫取りをしたが、先生は2万歩歩いても平気で、好きなことをしているからだろう。好きなことをすれば年を忘れられる」と述べた。台湾にも虫取りに出かけている養老氏は「子供のようにやんちゃになれることを見つけたらいい」と付け加えた。

養老氏と同じ飛行機で来て、車に乗ろうとしたとき、ガを見つけた養老氏が追いかけて走ったことを紹介し、「好きなことをするには、仕事をちゃんとこなすことが前提で、趣味は真剣に、仕事は期待通りにするのが私のモットー」と語った。解剖学が専門の養老氏は「人の遺体を扱う解剖は義務感だけではできない。遺族への挨拶も大事でストレスがたまるが、続けているうちに好きになった」と述べた。

菅管長は「僧が平均的に長生きなのは毎朝読経し、境内を掃除しているから。今、高野山での僧になる修行は45歳が上限だが、定年後でもなれるようにしたい。することがない高齢者は、僧になるか寺の掃除をしてほしい」と話した。

下重氏は「高齢者には家を貸してくれないなど日本には年齢差別がある。医者が病原が分からないとすぐ加齢だと言うのもおかしい。年齢を基準にすると管理しやすいからだが、そんなお役所仕事に抵抗すべき」と語った。

ブータンを訪れた養老氏は「少年がそのまま年を取ったような人たちに感心したが、中に日本人に似た人がいるので聞くと役人だった」という話を紹介し、AIに代表される管理社会に安易に管理されない生き方を提唱した。

聴衆は話にうなずいたり笑ったりしながら、それぞれ自分の人生を考えているようだった。

灯

「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい。これがわたしの福音である。この福音のために、わたしは悪者のように苦しめられ、ついに鎖につながれるに至った。しかし、神の言はつながれてはいない。それだから、わたしは選ばれた人たちのために、いっさいのことを耐え忍ぶのである。…次の言葉は確実である。『もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう。もし耐え忍ぶなら、彼と共に支配者となるであろう。…彼は常に真実である』」（テモテへの第二の手紙2・8―13）

イエス・キリストによって生まれ変わった使徒パウロが愛する弟子に語ったことば。私たちの生きる意味は、万物の創り主なる神から示されるものだと諭す。目に見えない神のみことばは主キリストによって見える姿になった。だからいつも主キリストを思い、主キリストのことばに耳を傾け、その方の模範に倣い、苦労をいとわず人々の為に生きる。それが、選ばれた者たちの務めだと言うのだ。（1）

社説

大嘗祭に供えられ 米と共に歩む日本人

天皇陛下は去る9月19日、皇居内の生物学研究所脇にある水田で、即位後初めての稲刈りをされた。

鎌を手に、5月に自ら田植えをしたもち米の「マンゲツモチ」と、うるち米の「ニホンマサリ」計100株を刈り取られ、昭和4年に昭和天皇が始められた行事を、上皇陛下から継承された。

刈り取った稲の一部は伊勢神宮に奉納されるほか、五穀豊穣を祈る2月の「祈年祭」などの宮中祭祀に使われる。

近年は8月下旬から稲刈りが行われるが、全国的には10月がピークで、黄金色の稲穂が頭を垂れる風景に、日本の秋を感じる人も多い。

11月14日から15日にかけて執り行われる大嘗祭は、即位された天皇が初めて迎えられる新嘗祭で、皇居・東御苑に新設された祭殿で、皇祖天照大神や天神地祇に感謝し、新穀（新米や粟）を神々に備え、国家安寧と五穀豊穣を祈られる儀式である。14日には、栃木県高根沢町から献上された「とちぎの星」を使い「悠紀殿供饌（ゆきでんきょうせん）の儀」が、15日には京都府南丹市からの「キヌヒカリ」で「主基（すき）殿供饌の儀」が行われる。まさに皇位継承のクライマックスである。

國學院大學神道文化学部の岡田荘司教授は、大嘗祭について「我が国の伝統祭祀を貫く儀式で、さらに、災害への恐れと備えという日本固有の想いも込められている」と言う。大嘗祭は、稲作を中心とした日本人の暮らしの象徴であり、天皇が常に「国民とともにある」ことを示すものと言えよう。

大嘗祭で供えられる神饌には、新米に加えて米から作られる「黒酒（くろき）」「白酒（しろき）」、さらに、奈良や京都では入手しづらい海産物や、阿波（徳島県）の麻織物「麁服（あらたえ）」と三河（愛知県）の絹織物「繪服（にぎたえ）」などの地方産品もあり、列島を挙げた儀式となっている。庶民の食べ物である粟が含まれているのは、災害への備えであろう。災害に遭っても生き残るという願いも込められているのである。

普段食べるのがうるち米で、もちにするのがもち米。両者の違いは含まれているデンプンの違いによる。うるち米はアミロースとアミロペクチンを含むが、もち米はアミロペクチンのみ。どちらもブドウ糖のつながりだが、アミロースは一本の鎖のような、アミロペクチンは分枝の構造になっている。そのためもち米は粘りやすく、消化吸収されやすいので、食べると血糖値がすぐに上がり、幸福感に満たされる。そのため大切な行事に用いられてきたのである。それに対してうるち米は固く、保存しやすいので、財産になり、貨幣代わりに使われてきた。

イネ科の特徴は生長点が根に近いので、刈ってもすぐに伸びる特徴がある。そのため牧草の多くもイネ科で、世界中で人類を養っている。もう一つの特徴は風に花粉を運ばせる風媒花で、多くの植物が風から虫に変えたのに、イネは古い形態を保っている。そのため、イネには虫を引き付けるような目立つ花びらはない。

種子が熟しても地面に落ちない非脱粒性は、植物にとっては致命的な欠陥だが、人間にとっては収穫して食糧にできるので、願ってもない性質である。そうした突然変異の株を発見したのが、イネと人類の共生の始まりと言えよう。

ブランド米の開発

日本人とゆかりの深い米だが、その消費量が減ったのは、食の西洋化、多様化による。一方、北海道産の米がおいしさから首都圏で人気を博すなど、各地でブランド米の開発が進んでいる。暖かい地方では、温暖化に負けない品種が開発されている。

米と日本人の歴史を概観すると、米が日本人という勤勉な民族を得て繁栄してきたようにも思える。生き物には人間と同じ柔軟性があり、本来の性質を守りながら、環境に合わせて自分自身を変化させていく。これからも新品種の開発は進み、化粧品など米の食糧以外での利用も広がるであろう。

普段、これという感慨もなく食べている米だが、大嘗祭は日本人が米のありがたさに気付き、感謝するきっかけになるかもしれない。さらに、日本人の足元を見直す期間になってほしい。

盛大に寒川神社で例祭斎行
天皇陛下の御即位祝い

神奈川県寒川町

参進する利根康教宮司、吉田茂穂献幣使、祭員、責任役員、参列者＝9月20日、神奈川県寒川町の寒川神社

9月20日、神奈川県寒川町の相模一之宮寒川神社（利根康教宮司）で例祭が斎行され、約250名が参列した。

例祭は、祈年祭・新嘗祭とともに「三大祭」と呼ばれる祭典の一つ。寒川大明神の御神恩への感謝と更なる繁栄を祈念する祭典で、寒川神社においては年間の祭典の中でも最も重儀な祭典に位置付けられる。例祭の前日は、午前10時に商工祈願祭並献灯奉告祭、午後1時に例祭宵宮祭、午後2時より流鏑馬神事が御本殿西側馬場で斎行され、例祭当日は、午前10時から役員・総代をはじめ、全国より崇敬者多数が参列し、盛大かつ厳粛に斎行される。

午前10時、斎主（利根康教宮司）、献幣使（吉田茂穂・神奈川県神社庁長、鶴岡八幡宮宮司）、祭員は修祓の儀の後に御社殿へ参進し、氏子総代、責任役員、参列者が続いた。宮司一礼、開扉の儀、献饌の儀が行われた。宮司が祝詞を奏上。続いて献幣の後、献幣使が祭詞を奏上した。4人の巫女が浦安の舞を奉奏。宮司が玉串を奉って拝礼し、献幣使が玉串奉奠。そして氏子総代、責任役員、星野剛衆議院議員、木村俊雄寒川町長らが玉串を奉奠した。閉扉の儀の後、宮司が一礼し、式典は滞りなく修められた。

19、20日の両日には境内一円で献花・献茶・奉納演芸等の神賑行事が行われ、20日の例祭当日には、境内で献花、献茶、献句、盆栽展、水石と美石、作品展が開かれた。午後は空手の演武、子供神輿、奉納演芸、祭囃子、剣道大会が行われ、午後5時半からは立俊成会による万灯パレード。そして神輿渡御が午後7時から行われた。また、23日にはシンコースポーツ寒川アリーナ武道場で柔道大会が行われた。

献花は千家古流・森久保社中によるもので、師範、寒川神社の巫女らの作品が奉納された。献茶は、裏千家田津原社中により50年以上続いている。茶を奉納した女性は「先輩方は昔から思いを込めて雨の日も風の日も茶を奉納してきた。私たちも先輩の思いと伝統を続けていきたい」と語っていた。

寒川神社は相模國一之宮で、全国唯一の八方除の守護神として1600年の歴史がある。八方除とは、地相・家相・方位・日柄などに起因するすべての禍事・災難を取り除き家業繁栄・福徳円満をもたらす、寒川大明神の全国唯一の御神徳。古くより、関八州の守護神として、また江戸をお護りする神社として信仰されてきた。

浦安の舞を奉奏する巫女たち

訂正とお詫び

9月10日号1面記事「第54回教誨師中央修練会」で、日本宗教連盟理事長の岡本光央氏は岡田光央氏の間違いでした。訂正しお詫び致します。

天地

天地子の田んぼで刈り取りの最後を飾るのが酒米。うるち米の一種で、粒が大きく、中心部が白く濁っている。この白い部分が「心白」で、アミロースがしっかり詰まっておらず、すき間があることから光が乱反射し、白くなる。生食米では嫌われるが、酒米ではこの心白が重要だ▼日本酒は、麹菌が米のデンプンを分解して、糖を作り、糖が発酵することでアルコールが醸成される。デンプンは麹菌のエサなので、すき間のあるほうが水分を吸収しやすく、麹菌は菌糸を伸ばしやすい。そのため、中心部が白濁しているうるち米を選び、山田錦などの酒米を作ってきたのである▼ワインはブドウの果実の糖がアルコールになるのだが、ビールのもとになる大麦には大量の糖はない。しかし、種子は芽を出すときに栄養分であるデンプンを分解して、エネルギー源となる糖を作りだす。そこでビール造りでは、最初に大麦を発芽させ、デンプンを糖に変える。その状態が麦芽（モルト）で、糖を蓄えた麦芽を発酵させアルコールにしたのがビールである▼米焼酎は日本酒を蒸留して造られる。日本酒を加熱すると、沸点が低いアルコールが先に気化するので、それを集め液化すると、元の日本酒よりアルコール度数の高い焼酎が得られる。ビールを蒸留したものがウイスキーで、スコットランドなど寒冷地で凍りにくくするために造られた。ラグビーWカップ予選リーグで、最後の強敵スコットランド戦を前にしてこの文を書いた。

宗教新聞社
発行所 宗教新聞社
東京都新宿区新宿5-13-2
〒160-0022
電話 03-3353-2940（代）
FAX 03-5363-5182
郵便振替口座 00130-9-22704
URL http://www.religion-news.net
©宗教新聞社 2019
購読料（税込）
1部 500円
半年 3,000円（〒共）
年間 6,000円（〒共）

〈社是〉
一、精神革命の旗手
一、宗教連合の具現
一、地上天国の建設

本紙定期購読のお申し込みは
■ご希望購読期間 ■氏名 ■郵便番号 ■住所 ■連絡先電話番号 ■メールアドレス（お持ちの場合）を明記の上、宗教新聞社宛、はがき、FAXまたはEメールで左記へお申し込みください。
宗教新聞社
〒一六〇―〇〇二二
東京都新宿区新宿5―13―2―4F
電話 03（3353）2940
FAX03（5363）5182
e-mailreligion@sage.ocn.ne.jp
http://www.religion-news.net
※購読料 年間6000円（税、郵送料を含む）

縄文のパワーフィールドへ
神道よ！今こそ《古来の本物の道》に戻るのだ！
奈良泰秀
エハン・デラヴィ 著
本物のシャーマニズムを日本人が忘れている。神道の潜在力を思い出し、世界に伝えていこう。ケルト民族末裔の意識研究家が、神道のエッセンスを聞き出す。チャネラー、ヒーラー、コンタクティを超える、宇宙と直接つながる知恵は、ここ日本の神道にあり！
四六上製1785円(税込)
株式会社ヒカルランド
〒162−0821 東京都新宿区津久戸町 3-11
電話：03-6265-0852 FAX：03-6265-0853
http://www.hikaruland.co.jp

日本宗教の闇
室生 忠 著 四六判・520頁 定価：本体2,000円＋税
拉致監禁による強制棄教との戦い
信教の自由が保障された今の日本で、強制棄教を目的に拉致監禁が行われている。職業的強制改宗屋が家族を巻き込み、信者を拉致し、部屋に監禁して、脅迫的説得により棄教を迫る。特に世界平和統一家庭連合（統一教会）やエホバの証人の信者に被害者が多く、中には12年以上の監禁された人もいる。驚くべき宗教迫害のリポート。
アートヴィレッジ
受注センター
〒657-0846 神戸市灘区岩屋北町3-3-18・4F
TEL078（882）9305 FAX078（801）0006

日本よ、蘇れ 日本神話の知恵
出雲井晶 著
ゆがんだ歴史観、家庭の崩壊、教育の危機…。いま日本は大きな危機に瀕しています。この現状を打破するカギは、実は「日本神話＝古事記・神代一」にあるのです。日本神話に満ちあふれる、愛と生命と知恵に立ち返ってこそ、日本の未来は拓けます。あなたも著者といっしょに、「神話の教え」をひもといてみませんか？
●定価1000円（税込み）
●四六並製 232ページ
●発行・産経新聞社／発売・扶桑社
お問合せ先／扶桑社 販売企画部
〒105-8070 東京都港区海岸1-15-1
TEL03-5403-8859
購入申込み FAX:03-3578-3075

日本国始め 饒速日大神の東遷
大野七三 著
須佐之男尊の出雲国創建後、饒速日尊が32従者と25軍団を従え、九州から大和に東遷して總向の地に大和国を建国。その時、饒速日尊が配下を募り配置した今も残るその出自と足跡を立証する。
『先代旧事本紀』の神髄を極めた著者が語る。足で調べた大和建国の謎。
（定価：本体2000円＋税）
批評社
〒113-0033 東京都文京区本郷1-28-36 鳳明ビル102A
TEL 03-3813-6344 Fax 03-3813-8990

自由社ブックレット2
理想の政教分離規定と憲法改正
四六判87頁／本体価格500円
杉原 誠四郎 著
憲法改正を見据えたとき、宗教に関する条項、規定は、真剣に考えねばならない問題である。
自由社
〒112-0005 東京都文京区水道2-6-3
Tel03-5981-9170 Fax03-5981-9171
http://www.jiyuusha.jp/

たま出版
www.tamabook.com
魔のJR中央線
自殺霊の撮影で判明したこと
齋藤 齋靈 著
十年の歳月をかけ、ついに自殺者の霊の撮影に成功。霊能者が書いた自殺防止の書。死んでも痛みは残るもの、自殺者の言い分、〝こんな筈では〟自殺をした状態で霊はさまよう、硫化水素自殺、政治家と自殺、自殺の多いJR中央線の謎を解く！
四六判158頁 定価1,365円（税込）
アシレス出版部発行
お近くの書店にない場合は下記へ 送料210円
〒229-0002 相模原市渕野辺本町2-17-14
TEL042（751）2558 FAX042（754）1818

新刊！
私の生命の復活
上橋 泉 著
日本人の宗教性（霊性）は回復するか？
人生の苦しみに積極的な意味はあるのか？
『21世紀に生きる日本人のための浄土恵想』の出版を記念して、平成26年3月から28年11月までの5回にわたる講演をまとめた著者渾身の生命の書。
四六判296頁（本体1500円＋税）
株式会社 如月出版 販売部
〒152-0023 東京都目黒区八雲2-24-15 ラ リュミエール1F
TEL 03-6657-9000 Fax 03-6657-8999
http://www.kisaragibook.com

クルアーン やさしい和訳
監訳著・水谷 周 訳補完・杉本恭一郎
2019年7月第3版発行、資料増補、大改訂 定価2700円＋税
読みやすく、理解しやすく、真髄を極める達意の新訳
国書刊行会
〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15
TEL：03-5970-7421